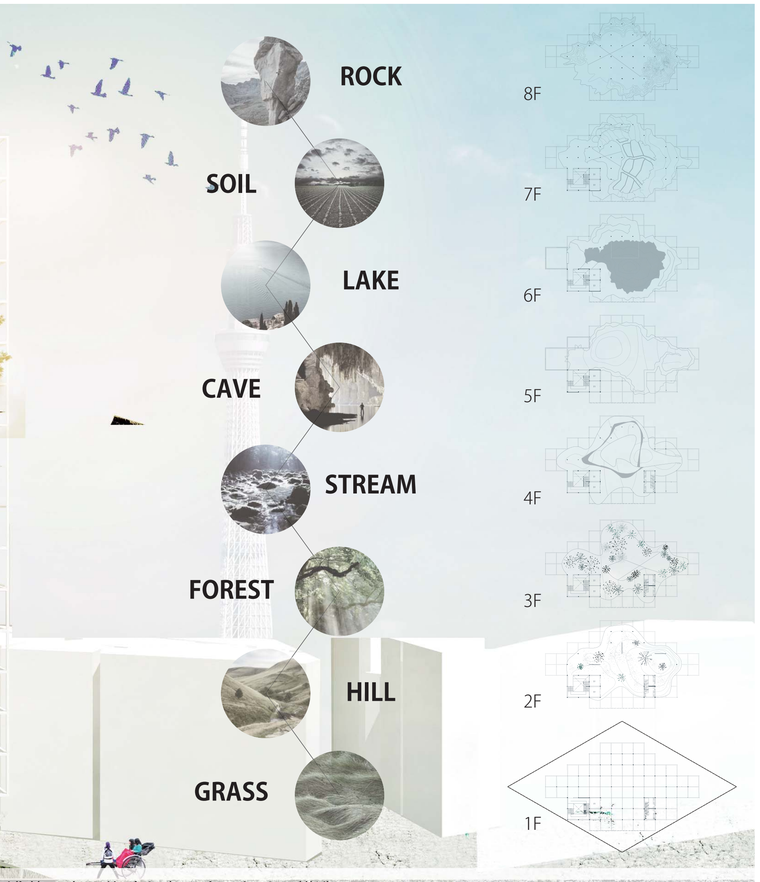
PROPAGATE ―― 隆起する浅草 ――

■浅草の最先端は公園という Landscape と共に変化してきた

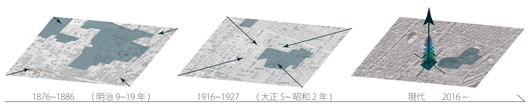
■公園 × Program = Asakusa Nuovo



■新しい浅草の空間体験を実現するための構造

1. かつてあった浅草公園 6 区の緑地

1873 年（明治 6 年）に「浅草公園」と命名され、一区から七区までが緑地と最先端の歓楽が混在する自然豊かな場所でした。しかし、浅草の発展とともの緑は失われ、高密で断片的な活動の場所となっています。
浅草の地に「山」のような立体的な公園を提案することで、再び豊かな緑を取り戻し、かつての自然と最先端の文化が共存する豊かな活動の拠点を提案します。



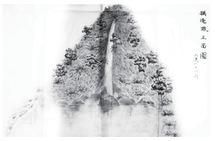
2. 求められる新たな浅草の公園とは

観光客にとって公園は浅草の賑わいから離れ、ゆっくりと休憩できる雑踏の中の余白的空間となります。

地域住民にとっての公園は日常生活に密着した市民活動の拠点である空間となります。

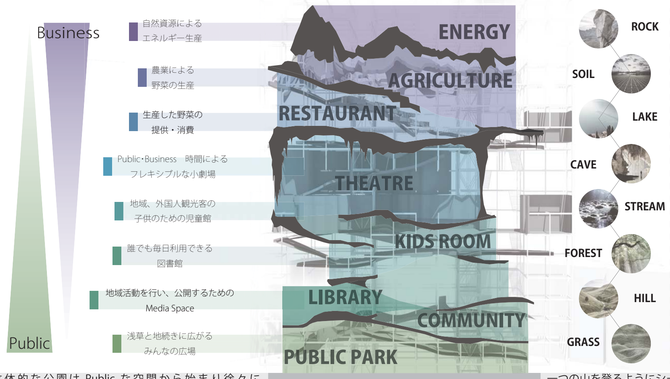
3. 浅草の築山

明治 43 年には浅草公園内の娯楽施設の一部として模造山がつくられ、日本初のアーバンシンボルとして存在していました。流れ落ちる滝はタンクとポンプで水を組み上げるという当時の最先端の建築技術の表れであり、浅草は Landscape としても最先端な場所でもありました。

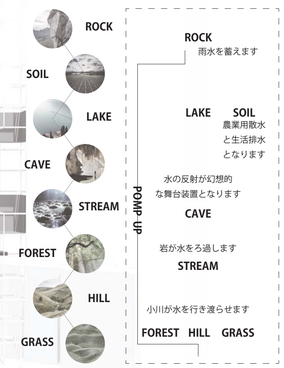


1. 公園と様々な Program を融合させることでヌーヴォーな体験を

山のように垂直に連続する公園に Public から Business にグラデーショナルに変化する複数の Program を挿入します。市民と観光客の双方のための Program は公園の自然のなかで新たな空間体験として提供されます。

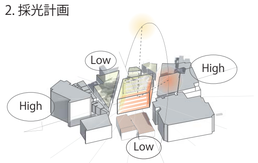


立体的な公園は Public な空間から始まり徐々に Bissiness へと変わっていくことで多種多様な人を公園内部へ引き込み、利用者それぞれの居場所を提供します



一つの山を登るようにシークエンスが連続する空間体験をし、その連続性は水の循環システムによって可視化することができます。

2. 採光計画



東西方向に低層建築が伸びているのに対し、スラブとグリット格子の構造体、ヴォイドの構成によって積極的に採光とそれによる光の移ろいを取り込みます。

3. 移ろう豊かな植生体験

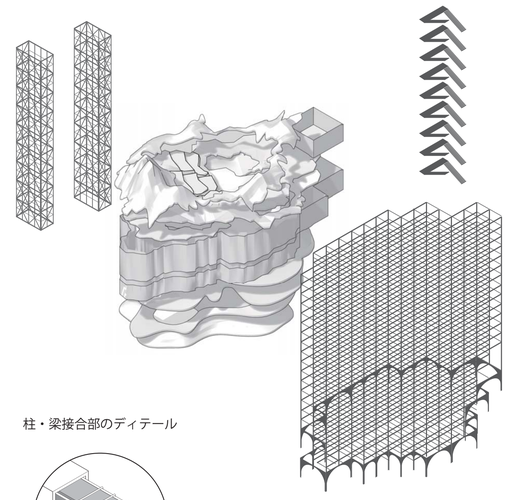
訪れるひとは公園内の一連の体験の中で、様々な種類の植物に出会います。
それらの植物は四季折々で変化するため、訪れる季節にともない、
自然の移ろいを楽しむことができるのです。

	春	夏	秋	冬
7F・8F	ウキクサ	ハス	パンジー	スイセン
5F・6F	キンセンカ	アジサイ	ススキ	ヤブツバキ
3F・4F	カキツバタ	ホウセンカ	キク	ヤドロキ
1F・2F	クスノキ	サツキ	サザンカ	ウメ

森の Library
地上から連続する緑は、旅行者を本の森に誘い、地域の人との隔たりを無くします。

Stream の乱反射
Cave の天井に反射した水と陽光が混じり、Stream は子供達のあたたかい遊び場となります。

洞窟の Theatre
Lake の水を纏い、シアターの空間は、幻想的に姿を変え続けます。



浅草の新しい緑豊かな公園は、建築の構法・構造によって垂直に伸びる山のように構築されます。ここでは、建築としての実現性だけでなく、浅草の元来の特質によって建築が構成されています。

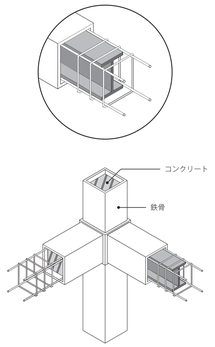
EV コア・水周りコア

各階に配置するエレベーターや水周りを垂直にまとめ、2 方向の軸に対しそれぞれ壁中にダンパーを入れることで耐震要素として利用しています。

CFT 柱による格子構造

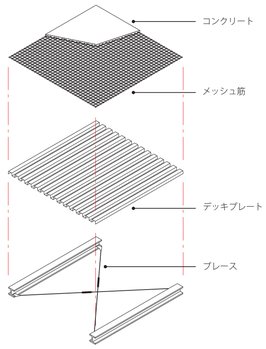
CFT 柱の格子構造は、不規則なスラブの支持と片側集約型のコア配置による地震時の偏心に対応します。柱は上下階で連続するようにし、コアと反対側の柱の本数を増やすことで、偏心を軽減しています。

柱・梁接合部のディテール

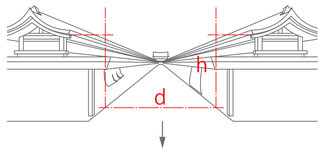


建築全体を支える格子の構造は可能なかぎり細い部材を用いています。その際、スラブや柱、梁は建築を支持しつつその細さや薄さを維持できるものを考えました。

合成スラブのディテール



浅草に馴染みのあるモジュールの抽出



浅草で古くから賑わいを生み続けてきた、馴染みのある「仲見世通り」から d/h のモジュールを取り出します。浅草における新しい賑わい作りの土台として格子の構造を構成します。

hlc00114